

# 上智大学

2021年度一般選抜（学部学科試験・共通テスト併用型）

学部学科試験サンプル問題

総合人間科学部

教育学科・社会学科・看護学科

**【学部学科試験名】** 学科共通試験

人間と社会に関わる事象に関する論理的思考力、表現力を問う総合問題

※教育学科、社会学科、看護学科共通試験のため、一度の試験で複数学科の併願が可能

**【試験時間】** 75分

※サンプル問題の出題形式は例であり、問題数は本試験と異なる場合があります。

1 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「消費生活に関するパネル調査」\*をもちいて、1960年代および70年代生まれの女性の、出産前後の就業率および就業継続率\*を、少し細かく確認してみよう。ここではひとまず、第1子出産前後の就業に限定する。

表1 1960年代および1970年代生まれの女性の第1子出産2年前・  
出産1年前・出産年・出産1年後の就業形態\*

	1960-69年生 (n=852)				1970-79年生 (n=581)			
	第1子 出産 2年前	出産 1年前	出産年	出産 1年後	第1子 出産 2年前	出産 1年前	出産年	出産 1年後
正規雇用	62.7	39.8	19.1	15.9	56.3	40.1	19.1	16.4
非正規雇用	15.6	11.2	4.6	6.0	21.7	17.4	6.9	11.2
自営業	5.2	6.3	6.3	6.3	2.6	2.9	4.0	4.3
非就業	16.6	42.7	70.0	71.8	19.5	39.6	70.1	68.2
計	100	100	100	100	100	100	100	100

表1は、第1子出産2年前、出産1年前、出産年および出産1年後の就業形態をコーホート\*ごとに示している。まず目を引くのが、1960年代、70年代生まれとも、第1子出産2年前から出産年にかけて、就業率が大きく低下することである。両コーホートとも、第1子出産2年前には80%程度の女性が就業していたのが、出産1年前には  %程度に、そして出産年には、 %程度まで低下する。就業形態に注目すると、出産2年前から出産1年後にかけて、正規雇用者割合が大幅に低下する。1960年代・70年代生まれともに、第1子出産2年前には正規雇用者が  %程度を占めていたのが、出産1年後には  %程度にまで低下している。コーホート間の差異はあまり目立たないが、非正規雇用者割合は、1970年代生まれのほうが高い。

次に就業継続について検討してみよう。表2には、各コーホートの分析対象者のうちの就業継続者割合、正規雇用就業継続者割合、また、前年に正規雇用者だった人のうちの正規雇用継続者割合を、第1子出産2年前から出産1年前、出産1年前から出産年、出産年から出産1年後にかけて算出した数値を示している。

表2 1960年代および1970年代生まれの女性の出産前後の就業継続者割合

	1960-69年生 (n=852)			1970-79年生 (n=581)		
	出産2年前 から 出産1年前	出産 1年前から 出産年	出産年 から 出産1年後	出産2年前 から 出産1年前	出産 1年前から 出産年	出産年 から 出産1年後
各コーホートの分析対象者全体の うちの就業継続者割合	54.2	28.5	23.9	56.3	25.8	23.8
各コーホートの分析対象者全体の うちの正規雇用継続者割合	37.9	18.8	15.0	36.8	17.4	14.5
前年に正規雇用者だった人のう ちの正規雇用継続者割合	60.5	47.2	78.5	65.4	43.3	75.7

就業形態を問わない、就業継続者割合は、1960年代・1970年代出生コーホートとも、出産2年前から出産1年前にかけては50%台であるが、出産1年前から出産年にかけては25~30%程度、出産年から出産1年後には20%強となる。正規雇用就業に限定して、各コーホートの分析対象者全体のなかでの継続者割合を算出すると、1960年代・1970年代出生コーホートとも、出産2年前から出産1年前にかけては30%台であるが、

出産1年前から出産年には20%弱、出産年から出産1年後となると15%程度にまで低下する。また、前年に正規雇用者だった人のなかでの正規雇用就業継続者割合を算出すると、1960年代・1970年代出生コーホートとも、出産2年前から出産1年前にかけては60%台、出産1年前から出産年にかけては40%台、出産年から出産1年後にかけては80%弱となっている。

各コーホート全体のうちの就業／正規雇用就業継続者割合の値は、出産1年前から出産年にかけてと、出産年から出産1年後にかけてとのあいだに、それほど大きなへだたりはみられない。そこから、**オ**ことが示唆される。とりわけ正規雇用に限定すると、出産年に正規雇用就業していた女性の**カ**%近くが、出産1年後にも正規雇用就業している。

ただし、(出産1年前から) 出産年まで就業継続した人の割合は、就業形態を問わない場合には25~30%程度、正規雇用に限定すると20%弱と、決して高くはない。表2からは、出産年まで就業継続するような女性自体が、全体のなかでは非常に少数であることが読みとれる。

これらの数値と、他の調査データによって明らかにされてきた数値から、1940年代以降に生まれた女性について、いくつかのことが確認できる。まず、第1子出産1年後の就業率は25~30%程度であり、正規雇用就業率は10~15%程度である。また、第1子出産を経て就業継続する女性は約20%であり、正規雇用に限定すると就業継続率は15~20%程度である。1940年代から1970年代生まれにかけてのコーホート間の差異は、それほどみられない(強いていうなら若いコーホートで**キ**割合が増加している傾向はみられる)。1980年代生まれでは就業継続率がやや高くなっている可能性はあるが、まだ十分なデータがそろっていない状況である。

また、「消費生活に関するパネル調査」の分析からは、1960年代・70年代生まれで、第1子出産を経て就業しているのは、出産年まで、それまでの仕事を続けることのできた少数の女性であることが示唆される。表2が示すように、出産年に正規雇用就業していた女性の約**カ**%が、出産1年後にも正規雇用就業を継続している。しかし同時に全体でみると、出産年まで正規雇用就業継続するような女性自体が、非常に少数であることもわかる(出産1年前に正規雇用就業していて、出産年にも正規雇用就業していた人は、各コーホートとも全体の20%に満たない)。第1子出産1年後に働いているのは、出産までのあいだに継続就業できるような条件に、たまたま恵まれた数少ない女性であり、大多数の女性が出産年までに就業継続を断念している。

(出典：西村純子『子育てと仕事の社会学』弘文堂、2014年 による。一部改変)

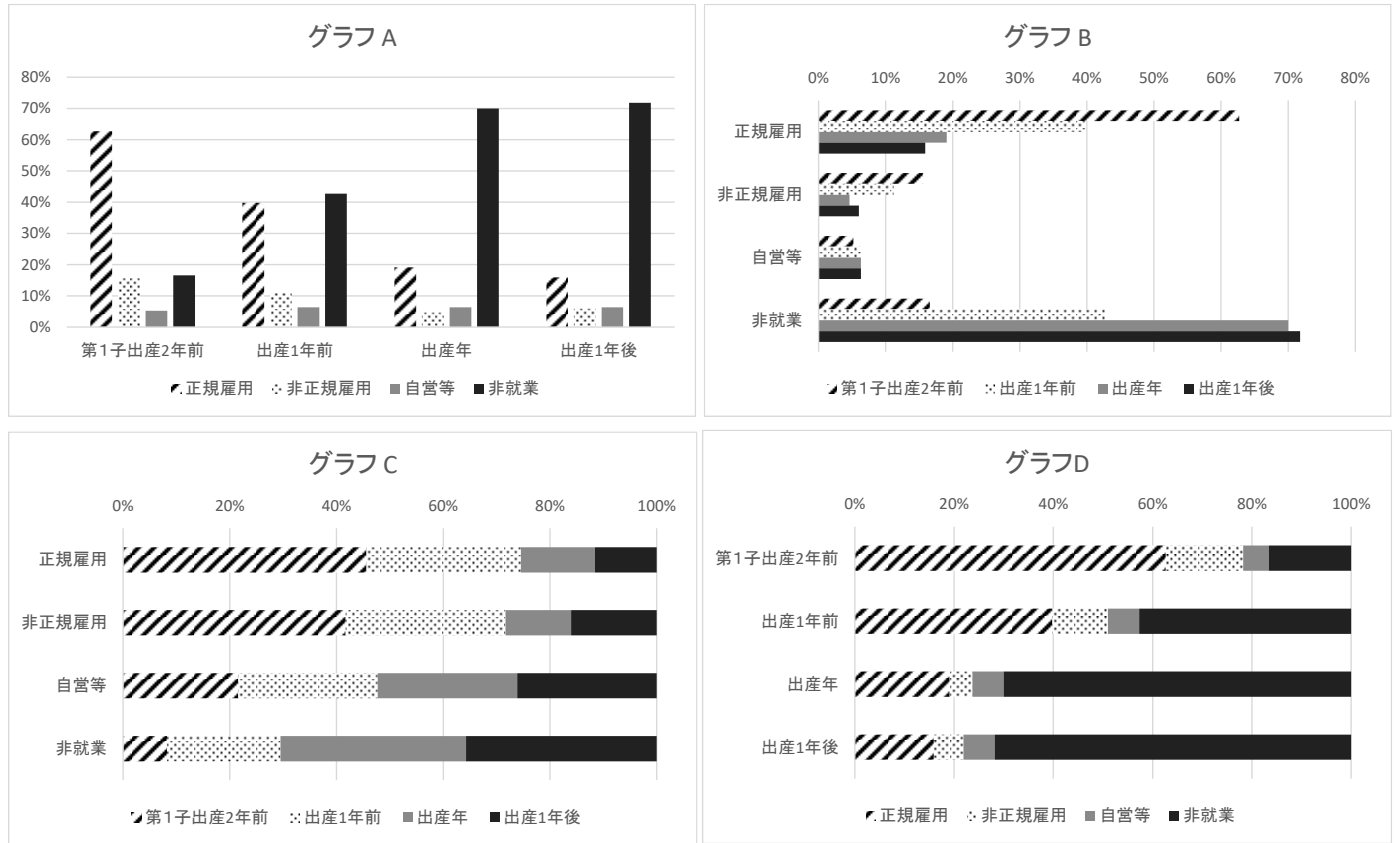
[注(※)]

- 消費生活に関するパネル調査 公益財団法人家計経済研究所が1993年から実施している調査(同一個人を追跡して行う調査をパネル調査と呼ぶ)。1993年に24~34歳(1959~1969年生まれ)の全国の女性を対象に開始され、その後1970年代以降生まれの調査対象者を追加しながら毎年行われている。
- 就業継続率 ある時点aとそれ以後の別の時点bの間で、対象者の就業状態に変化がなかった場合、就業を継続したとみなして「就業継続」と呼ぶ。就業継続率とは、時点aで就業していた者を分母としたときの時点bでの就業継続者の割合を指す。
- 表中の「n」は人数を指す。
- コーホート ある地域や社会において、人生における同一の重大な出来事を一定の時期に経験した人々。たんに「コーホート」という場合、特定の時期に出生を経験した「出生コーホート」を指す。

問1 空欄  ～  に入る数値として最も適当なものをそれぞれ下の数値群から選び、数値を記入しなさい（同じ数値を複数回用いてもよい）。

(数値群)

問2 表1の左半分（1960年代）の情報をグラフにまとめた場合、最も適当なものはどれか。下のグラフA～Dのうちから一つ選びなさい。



問3 空欄  に入る適当な文を記しなさい（句読点を含め40字以内）。ただし、下のキーワードをすべて用いること。

(キーワード)

問4 空欄  に入る適当な数値を記しなさい。

問5 空欄  に入る最も適当な語句はどれか。下のA～Dのうちから一つ選びなさい。

(選択肢)

問6 本文の主張を要約しなさい（句読点を含め40字以内）。

2 次の文章は「日本の自己表現」というエッセイの一部である。これを読んで、後の設問に答えなさい。

現在の日本が抱えている問題は、大部分、われわれが今日の国際社会の中で行動するにつれて<sup>たいとう</sup>擡頭して来たものだといえます。そして今日の国際社会は、良かれ悪しかれ世界の「標準語」というべき近代文明、つまりは西洋文明の力と論理によって運営されています。したがって日本の文化と国民性の本質を歴史的に考察するにしても、まずは、日本が西洋と接触していた時代に目を向けるのが有効な手がかりになるはずです。

そう考えると、室町時代から桃山時代にかけてのあの百年間、すなわち十六世紀という時代は、興味深い実験室の役割を果すようです。というのは、この時期、日本が大規模に接触することになった西洋文化は、すでに近代の性格を十分に帯びていながら、幕末期とは違ってその背後に暴力を伴っていなかったからです。日本の近代化は一面、日本が西洋によって暴力的にこじ開けられたという要素を否定できないわけで、まさにそのことも加わって、日本人は自分の西洋的な生活風俗に一種の違和感を抱きつづけて来た、ともいえるでしょう。しかし、室町時代、日本を初めて訪れた西洋の宣教師たちは、日本の社会や政権を直接脅かすような軍事力を伴っていませんでした。いいかえれば、このとき、日本は西洋に対して意に反してみずからを開かなければならない事情はなかったわけで、したがって、このときの西洋接触は、本質において内発的なものだったと見ることができます。さらにいえば、それゆえこの接触で日本人が示したさまざまな性格は、少なくとも幕末のそれに較べて、日本人の本性により近いものだった、ということもできるでしょう。

当時の西洋宣教師たちの証言や、日本人が遺している記録から推察すると、まず目につくことは、日本人の異質文化への好奇心は、東洋諸国の中でほとんど例外的な強さを見せていたという事実でしょう。日常生活の道具や風俗から、技術や思想にいたるまで、われわれの先祖はきわめて旺盛な好奇心を発揮してこれを取入れ、このとき取入れられたもののいくつかは、現代の日本文化の中にも残っています。鉄砲作りや造船術はもちろん、天ぷらや金米糖やガラスやビロードに人びとは夢中になり、そして多分に風俗化されたとはいえ、キリスト教はこのとき国中で爆発的に流行しました。京の町で、ロザリオを手に持ち、十字架を首にかけて歩く若者が無数に見られたという事実は、他の東洋諸国の反応と比較したとき、ほとんど<sup>どうもく</sup>瞠目に価します。

アラブでも、インドでも、中国でも、西洋文化は大衆的なレベルでは何の痕跡も留めておらず、ときに軍事的暴力によって植付けられた名残りさえ、歴史の波にたちまち洗い去られてしまっています。数年前、私はインドのゴアを訪れて、この三百年に及ぶポルトガル植民地に、ポルトガルの文化の何ひとつ根づいていないことに驚きました。壮麗なカトリック教会がジャングルの中で活きた廃墟と化した光景も異様でしたが、それが物語るように、この土地でキリスト教に<sup>。</sup>キエしたインド人の数は驚くほど少なく、食物や風俗などの生活文化の中にも、ポルトガルのものはほとんど残っていません。皮肉なことに、今日のポルトガル料理の中にはカレー料理がはいついて、支配者だった西洋の側が、逆にインド文化の影響を受けた事実を教えられます。

さらに注目すべきは、十六世紀の日本人が、あたかも近代人のように、生活を改善することに、並々ならぬ意欲を持っていたということです。昨日より今日の方が、明日の方が今日よりも、生活は良くなるものであり、良くすべきものだという広義の進歩思想が、日本人のあいだでは鎌倉時代から暗黙のうちに認められていたようです。実際、鎌倉の終りから室町にかけて、日本の稲作技術はめざましく発展しました。その結果、余剰の米を酒造りにまわす余裕が生まれ、その酒造家の手もとに多くの財貨が集まって、やがて「酒屋」と呼ばれる金融業者が出現したことは広く知られています。<sup>しやうゆ</sup>醤油や<sup>まんじゆう</sup>饅頭といった新しい食物が登場したのも、畳敷きの座敷が発明され、そこに床の間が設けられるなど、住宅のかたちが飛躍的に発展したのも室町の初

めでした。このような生活改善の意欲もまた、東洋諸国のなかで異例のものだったということは、西洋宣教師たちの証言からうかがうことができます。アラブ人にとっても、中国人にとっても、生活というものは変わらないことに価値があり、目まぐるしい生活の変化は、むしろ不安の種として受け取られていたように思われます。

また、当時の日本人のこうした好奇心と生活改善意欲の背後に、一種の個人主義的な思想がうかがわれるのも興味深いところです。鎌倉の末期から日本人はあるいは「唐物好き」、あるいは「茶好き」というようなかたちで、盛んに個人的な趣味と嗜好を重んずるようになって来ました。これがやがて「数寄屋作り」の「数寄」にまで発展してゆくのですが、いわゆる中世的な、普遍的な美意識に別れを告げ、個人の個性的な好み  
が尊重されるようになる時期が、日本においてはきわめて早く到来しているようです。加えてこの時期の日本人には、個人の才能や、身につけた技術を尊重するという傾向も顕著に見受けられます。兼好法師の『徒然草』を読めば、弓矢の才や乗馬の術はもちろん、歌や物語りを作る才能、はては木登りの名人などという  
ものまで、世人から大いに尊敬されていたことがわかります。そして、こうした個人的な才能の、シンポウ  
と、個人的な好みの尊重とが、その延長として、異質文化への好奇心や生活改善の意欲を支えていたことは  
疑いありません。

イ

そのうえ、わが国には、京都を代表とする近代的な都市、いいかえれば、市民を持った都市が、早くから  
成立していた、ということもいえそうです。強権のもとに多数の人間が群れ集まっている、というだけの都  
市なら、昔から世界中に存在したわけですが、多様な市民が、それぞれの好みを主張し、技術を発揮しなが  
ら、活発で混沌とした社会を築きあげるといえることは、西洋でも近代を待たねばなりません。ところが  
日本では、そうした意味での都市が、明らかに室町初期の京都に成立していて、しかも一種の市民意識、  
あるいは都会人の誇りというべきものすら、そのころまでに生まれていたと推定されます。たとえば『徒然  
草』の中で、兼好法師は都会人を田舎の人と比較して、同時代の都会人の優れた点を積極的に評価していま  
す。彼によれば、都会人はすべてのものを「よそながらに見る」人であり、余裕と距離を置いてものを見る  
ことによって、容易に群集心理のようなものに振り回されない人間だ、ということになります。現代でも、  
都会が雑多な市民を包含しながら秩序を保つためには、たしかにそうしたソフィスティケーションの精神が  
必要なはずで、それが室町時代にすでに存在したという証言には、いささかの驚きを禁じ得ません。

最後にもう一つ、再び西洋の宣教師たちの証言によれば、当時のわれわれの先祖は、きわめて合理的な思  
考法と論争の術にも長けていたようです。フランシスコ・ザビエルが薩摩に上陸したとき、この地の武士や  
僧侶は、次々と彼に質問を持ちかけたといいますが、その内容はいまの水準から見ても哲学的にかなり程度  
の高いもので、宣教師たちも答えに窮した様子がうかがわれます。たとえば、キリスト教は ウ  
な真理であり、永遠の教えである、という。フキョウに対して、彼らは、もしそれが ウ  
で永遠の真理ならば、なにゆえに歴史上のその時代になって、初めて日本に伝えられたのかと訊ねたとい  
います。キリストの教えが本当に人類永遠の真理なら、あたかも算術の常識のように、日本人は西洋人に学  
ぶまでもなく、本来、歴史の初めから知っていたはずではないか、というわけです。こうした論理的な、鋭  
い質問にザビエルは大いに悩まされたようで、ついに「これは一種の法難である」という言葉を記録に遺  
しています。

また、『元和航海記（げんなこうかいき）』といって、当時の日本人が西洋の船乗りと交わした航海術の問  
答書も残っていますが、その中の質疑応答もまた、一見して合理的で、論理的な水準の高いものであること  
が目につきます。相手になった船長も宣教師同様、鋭い質問に、ヘイコウして、しばしば「それは自分たちにも  
わからない」と答えている場面が見られます。

さて、以上のように特色を列挙してみると、十六世紀の日本人が国際貿易に長け、技術革新にすばらしい能力を発揮したのも、少しも意外ではないといわなければなりません。当時の日本が、アラブから東の世界でただひとつ、国際貿易の観念が成立していた国だということは、ジョージ・サンソムのような近代の西洋の学者も認めています。事実、お隣の中国はおよそ外国の珍しい商品などに何の関心も示さず、西洋の商人に期待したものは純粋な金だけでした。したがって、中国人と交易する限り西洋人は輸入超過にならざるを得ない道理で、マカオのポルトガル商人はもっぱら日本に商品を輸出し、それによって得た金を中国人に納めることで、この貿易港を維持したといわれます。

技術革新という観点から見ても、十六世紀の日本の実験は目覚ましい限りでした。わずか二丁の鉄砲が種子島に漂着してから、二、三十年のあいだに、わが国の鉄砲保有は数千丁の規模に達し、信長と武田氏の決戦ではこれが決定的な武器になっています。造船技術の飛躍についていえば、日本の西洋風帆船は西洋人のあいだでも驚嘆の的で、支倉常長（はせくらつねなが）の遣欧使節がメキシコにたどりついたとき、太平洋を横断した西洋風の船は、日本の職人の手で建造したものでした。しかも、この船はその後、スペイン海軍に編入されて、長い航海にも耐えて軍艦として用いられたといわれます。

近代の日本の技術革新は世界的な注目を浴び、わずか百年間で西洋に追いついたと騒がれていますが、十六世紀の日本人にいわせれば、これはむしろ遅すぎたといえるかもしれません。彼らは百年どころかわずか二、三十年のあいだに、西洋の技術と思想の水準に「追いつき、追い越し」ていたからです。

（出典：山崎正和『混沌からの表現』ちくま学芸文庫、2007年 による。一部改変）

問1 傍線部 a から d のカタカナに相当する漢字を楷書で書きなさい。

問2 下線部ア「興味深い実験室の役割を果す」と述べているのはなぜか、説明しなさい（句読点を含め70字以内）。

問3 文中の空欄  には下のA～Dの4つの文が入る。正しい順序に並び替えなさい。

- A 為替という経済制度は、西洋を知る前の日本人が独自に発明していた技術ですが、この技術の成立は、商売人は嘘をつかない、という市民道德の存在なしには考えられません。
- B 事実、西洋の宣教師は日本の庶民層の倫理水準の高さに驚き、神を信じるかどうかという一点を除けば、これは西洋人よりも優れた国民だと、本国への報告に書き遺しています。
- C 京都の商人の多くは、当時、日蓮宗徒でしたが、この宗派が同時代のどの宗派よりも社会意識が強く、個人に厳しい規律を要求したという事実も、注目に値します。
- D さらに、商業を中心とする、いわば近代生活の実用面における市民的な道德が、この国ではかなり早くから確立していたと推察されます。

問4 空欄  に入る最も適当な語句はどれか。下のA～Eのうちから一つ選びなさい。

（選択肢）

問5 本文の主張を要約しなさい（句読点を含め70字以内）。

【解答例】

①

問1 ア 60 イ 30 ウ 60 エ 15

問2 D

問3 出産年まで就業継続した女性は、出産後も就業している傾向が強い

問4 80

問5 A

問6 1960 から 70 年代生まれ女性の大多数は出産以前に就業継続を断念している。

②

問1 a 帰依 b 信奉 c 布教 d 閉口

問2 16世紀日本の西洋文化との接触は、西洋の軍事力に強いられない自発的なものであったため、日本人の国民性が良く現れていると考えられるから。

問3 D→A→C→B

問4 C

問5 16世紀の日本人は、他文化への好奇心、生活改善意欲、市民道徳、合理的思考、技術革新の速度などにおいて当時の西洋に匹敵した。